

「ただいま」

「ただいま戻りました」

高等魔法学院が終わった後、俺とシシリーは一緒に俺の家に帰って来た。

シシリーの言葉が『お邪魔します』ではなくなって随分経つから、大分自然に言えるようになってきた。

最初の頃は恥ずかしそうにしてたもんな。

「おや、お帰り」

「ほっほ、もうそんな時間か」

帰って来た俺達を出迎えてくれたのは、風呂上りと思われるばあちゃんと爺さんだった。

っていうか、この時間に風呂上りって。

「またシシリーの実家に行ってたの？」

「いつ行ってもいいって言われてる親戚になる家だよ？ 行って何が悪いんさね」

「まあ、そうけど……」

とはいえ、頻繁に行き過ぎじゃないか？

いい加減、向こうも迷惑なんじゃ……。

そう思っただけでシシリーを見ると、彼女はニツコリ笑って言った。

「前も言っただけじゃないですか。皆さん、お爺様とお婆様のお世話が出来るって大喜びしてるって」

確かにそう言ってた。

王都の屋敷からクロード領の屋敷に異動したって人もいるとも言ってたし。

それでもなあ、やっぱり申し訳ない気がするんだよ。

こういうところは、日本人だった前世の影響が濃く出ちゃうな。

相手がいいって言ってるのに、妙に遠慮しちゃうとか。

二人の話を聞いていると、遠慮している俺が間違ってる気がしてくる。

それはなんか悔しいので、ばあちゃんに反撃してみた。

「……あんま風呂ばっか入っていると、今以上にシワシワになる……」

「なんだってえっ！！？？」

「うわ！！」

ヤベッ！ ばあちゃんが本気でキレた！

「コレ！ お待ち！！」

「ヤダよ！ 待ったら絶対折檻されるじゃん！！」

「当たり前さね！！」

うおお！ ばあちゃんが鬼の形相で迫ってくる！

俺の迂闊な発言が悪いとはいえ、本気でキレたばあちゃんに追い回されるのは恐怖以外の何物でもない。

俺は助けを求めようと、シシリーや爺さんの方を見たのだが……。

「あ、あはは……」

「ふう……やれやれ。メリダにあんな事が言えるのは、世界広しと言えどシンだけじゃのう。ワシには恐ろしゅうてよう言えんわい」

俺が見たのは、苦笑して助けてくれる気配のないシシリーと、溜め息を吐きながら首を振っている爺さんの姿だった。

駄目だ！ 助けがない！！

「つかまあえたあ」

「うひいっ！」

「きゃっ！」

怖っ！ ばあちゃん怖っ！

なんか妖怪みたいになっているばあちゃんから逃れるため、俺は咄嗟にシシリーの後ろに逃げ込んだ。

「シシリーィ……そこをお退きい……」

「ひうつ」

ああ、駄目だ。

シシリーが恐怖のあまり引き攣ってしまっている！

どうしよう！？ どうする！？

そうだっ！！

「シ、シシリー！ そういえば今日、学院で沢山課題出されたよね！？」

「ひ……え？ あ、はい」

「という訳で！ 俺達は部屋で課題をやります！ 邪魔しないでね！ 行こうシシリー！！」

「きゃっ！」

「あ、し、失礼しますお婆様！」

「あ！ コレッ！」

課題をやるから邪魔をするなど言えば、それ以上追ってこないだろうと考えたけど、どうやら正解だったらしい。

シシリーの手を引いて、俺の部屋に逃げ込んだ俺達は、そこでようやく一息ついた。

「はあ……怖かった……」

「もう、駄目じゃないですかシン君。女性はいくつになっても見た目を気にするんですよ？」

「そうは言ってもな……」

身内であるばあちゃんの見た目とか気にしろって言ってもな……。

「それにしても……怒ったお婆様、怖かったですね……」

「そう？ あんなのしょっちゅうだよ？」

「シン君……」

若干呆れたような、困ったような顔をして溜め息を吐くシシリィ。

そんなに変な事かな？

身内ってしょっちゅうああやって怒ってるような気がするんだけど。

「それよりさ、今日ホントに沢山課題出されたじゃん。思わず言い訳に使っちゃったけど、いい機会だからそのままやろうか？」

「そうですね。あ、その事マリーカさんに伝えてきます」

「分かった」

シシリィはそう言って部屋を出ていった。

なぜなら、シシリィがこうしてほぼ毎日家に来ているのは、なにも遊びに来ているからじゃない。

嫁入りする前にウオルフォード家の事に慣れておくようにと、ばあちゃんとアイリィンさんから言われているからだ。

なのでシシリィはウチにいる時、メイド長であるマリーカさんと一緒に行動していることが多い。

今日はこのまま学院の課題をするので、その旨を伝えに行ったのだ。

そして、しばらく経つとシシリィが戻って来た。

若干疲れた顔をして。

「ど、どうしたの？」

「下の階でお婆様に会いました……」

「そ、そうか……」

捕まっちゃったのか……。

「もうあんまり怒ってらっしゃらなかったですけど、気を付けて下さいね？」

「そうだな……前向きに検討するよ」

「なんですか、その曖昧かつ信用できない台詞……」

身内だからなあ。

思わず遠慮ない言葉が出ちゃうんだよ。

「そんなことより、課題やろうか。何が出たっけ？」

「ええと……歴史と数学ですね」

「……なあ、俺らの通ってる学院って、何学院だっけ？」

「本当に……魔法学院の筈なんですけどね」

高等魔法学院に通っていながら、出される課題は座学のものばかり。

魔法に関する課題なんて、最初の頃以来出されていない。

それ以外の教科も大事なのは分かるけど、最近の授業を受けているとそんな疑問が頭をよぎる。

「それじゃあ、数学からやるか」

「そうですね。歴史は調べ物をしないといけませんから時間が掛かりますし」

そうして俺達は、学院から出された課題に取り組み始めた。

「ん……くあ……数学終わったあ」

「じゃあ、次は地理やります？」

「そうだね。っと、その前にトイレ行ってくる」

「あ、はい。じゃあ、その間に準備しておきますね」

「うん、お願い」

歴史の課題には教科書以外の文献が必要なので、その準備をシシリーにお願いし、俺はトイレに行くために部屋を出た。

この時、俺は完全に失念していた。

「待ってたよ、シン」

「げえっ！ ばあちゃん！」

部屋の外にはばあちゃんがいることに。



『げえっ！ ばあちゃん！』

トイレに行くために部屋を出ていったシンの絶叫は、シンの部屋にいたシシリーの耳にも届いた。

「もう……シン君ったら……」

ウォルフオード家では、もはや日常茶飯事と言って良いシンとメリダのじゃれ合い。

国のトップである国王や、魔法使い達を束ねる魔法師団長ですら頭の上がないメリダ。

そのメリダに対し、遠慮が全くないシンを見て、シシリーはやっぱり家族なんだなと思う一方で、少し寂しさも感じていた。

「やっぱり、まだ遠慮してる感じだよね……」

想いが通じ恋人になったシンだが、その扱いはやはりメリダとは違う。気遣われているし、優しくしてくれる。

それは嬉しいし、大切にされていると感じると幸せな気持ちにもなる。

しかし、シンとメリダのやり取りを見ると、やはり自分は『恋人』ではあっても『家族』ではないのだと、そう思ってしまう。

「そのうち、私もあんな風に遠慮のない間柄になれるのかな？」

メリダのようにシンを怒りたい訳ではない。

メリダにするように、シンから明け透けな事を言われない訳ではない。

でもやっぱり、今以上にシンと『特別』な関係になりたいと、シシリーはそう思っていた。

「でも、それってどうやったらなれるのかな？ 結婚したら？ それとも……」

そこまで考えてシシリーは自分がとんでもないことを考えていると顔が熱くなった。

「わ、私ったら、何を考えているの！？ そんな……シン君に、だ、抱かれ……」

そこまで独り言を口にして、それ以上言うのを止めた。

確かに、所謂男女の関係になることは、間違いなく『特別』な関係になることだろう。しかし、シシリーの望んでいる『特別』は精神的なものであり肉体的なものではない。自分で分かっているのに、思わず口にしてしまったその言葉に、一人で羞恥に悶えてしまったのだ。

「やだ、もう……何やってるの私……」

もし、この様子を誰かが見ていたら、シシリーがおかしくなったのかと思うだろう。幸いなことに、シンはまだメリダに捕まっているらしく、部屋には自分一人しかない。

一人で悶絶していたところを誰にも見られなかったことに安堵したシシリーは、気を取り直して課題の準備に取り掛かることにした。

「えっと……確か今回の課題に必要な本って、シン君の机の棚にあったような……」

そう言いながらシンの机まで来たシシリーは、机の上に置いてあるノートに気が付いた。

「なんだろう？ 記号？」

そのノートの表紙には、見たことのないものが書かれていた。

それは直線と曲線で書かれた、まるで記号のような物。

漢字である。

それが文字だと認識していないシシリーは、その不思議な記号が書かれているノートが気になった。

シンのノートを手に見るのはいけないことだと認識しつつも、そのノートに何が書かれているのか気になって仕方がない。

どうしよう？ やっぱ駄目。でも……。

そんな葛藤を何度か繰り返したシシリーだったが、結局シンの秘密を見たい誘惑に勝てず、そのノートを開いた。

「ええと……なんだろう、これ？」

ノートに書かれていたのは、簡単な絵と表紙に書かれているものと同じような記号。

一見すると、落書きにしか見えない。

でも、あのシンがそんな幼稚なことをするだろうか、シシリーは考えた。

誰もが思いもしないことを思いつき、見たことも聞いたこともない魔法の数々と平然と繰り出す。

シシリーから見たシンは、正に天才なのである。

そのシンがノートに落書き？

とてもそうは思えなかったシシリーは、コレは何かとても重要な物なのではないかと考えた。

その時。

「はあ……えらい目に遭った」

自分の部屋なので、シンがノックをせず急に部屋に入ってきたのである。



「はあ……えらい目に遭った」

トイレに行こうと部屋を出たら、ばあちゃんに出くわしてしまった。

課題に集中し過ぎて、ばあちゃんを怒らせたのをすっかり忘れてたわ。

そのばあちゃんから、身内でも言っただけの悪いことがあるとか、女にそんなデリカシーの無い言葉を言うとか、散々説教されてしまった。

まあ、これではあちゃんの怒りは鎮まったし、よしとしよ……。

なあっ！？

シシリーがああノートを見てるう！？

「わあああっ！！」

「シ、シン君！？」

シシリーが見ていた机の上のノートを速攻で奪い去り、体の後ろに隠した。
ヤベエ。

どこまで見られたのだろうか？

「シン君……」

「な、なに！？」

「その……勝手にノートを見たのは謝ります。ごめんなさい」

「ああ、うん！　いいよ！　別に変なこと書いてる訳じゃないし！」

「そう、ですか」

「そうそう！」

この様子だと、ノートの中身はあんまり見ていない感じかな？

ノートの文字は日本語で書いていたし、内容はシシリーには理解できなかったはず。ただ、あれには簡単なイラストも描いていた。

そこから想像されるとマズいんだよね……。

「でも、変なことを書いていないなら、なぜそんなに必死に隠すんですか？」

「うえっ！？」

やべ、驚き過ぎて変な声出た。

言われてみれば、ノートの内容がどうこうより、俺の取った行動は見られちゃまずい物を見られた奴の反応だ。

シシリーが訝しがってもおかしくない。

「そのノート……何が書いてあるんですか？」

「え？　えっと、その……」

「やっぱり……私には言えないことなんですね……」

「え？　ええ！？」

あれえ！？　なんでシシリー涙ぐんでるの！？

コレ、シシリーを泣かせるようなことなの？

「あ、あの、シシリー？」

とりあえず、泣き止ませようと近付くと、何かを決心したようにシシリーが顔を上げて、俺に飛び付いてきた。

「見せて下さい！」

「ええ！？　ちょ、ちよっと待って！」

「なんで隠すんですか！？　変な物じゃないんですよね？」

「そ、そうだよ」

「なら見せて下さい！」

なんでそうなるの！？

シシリーがなんでそう言うのか理解できないしていると、シシリーが思いもかけないことを言った。

「私達、家族になるんじゃないんですか！？」

「え！？」

その言葉に驚いた俺は思わず体が硬直した。

その為、勢いよく俺に向かってくるシシリーを支えきれず、ベッドに倒れ込んでしまった。

「うわっ！」

ベッドに倒れ込んだ俺の上に跨りながら、ポロポロと涙を流すシシリーが言葉を振り絞るように言った。

「家族になるのに……なんで隠し事なんてするんですかぁ」

「え？」

「家族になるのに……シン君のお嫁さんになるのに、私は……私だけいまだにお客さんです……そんなの、そんなの嫌なんです！」

「シシリー……」

「お願いです……隠し事なんてしないで下さい……」

ポタポタと、シシリーの涙が俺の胸の上に落ちてきた。

……そうか。

シシリーはそんなことを考えてたのか。

全然気づかなかったな……。

「シシリー、ゴメンな。正直に言うよ」

「シン君……」

意を決してシシリーにノートの内容を告げると言うと、シシリーはようやくホッとした顔をした。

でも……。

「シシリー、これだけは約束して」

「なんですか？」

「……絶対、ばあちゃんには内緒で」

「……ひよつとして、お婆様が怒りそうなのが書いてあるんですか？」

「ああ、まあ……もしかしたら？」

「……いいです、わかりました。約束します」

「絶対だよ？ これはね……」

俺が少し溜めると、シシリーがゴクリと喉を鳴らした。

「……俺が考えた魔道具のアイデアが書いてあるんだ」

「シ、シン君の考えた魔道具のアイデア……」

おお、シシリーの驚愕した表情なんて初めて見た。

「一体……どんなことが書いてあるんですか？」

そのシシリーの質問に、ノートを見せながら答えていく。

すると、段々頭が下がっていき、最後には溜め息を吐かれた。

「はあ……シン君が隠したかった理由が分かりました」

「そ、そう？」

「そんなの、お婆様が見たら絶対怒るに決まっていますよ……」

だろ？

だから必死で隠したんだよ。

「それにしてもさ、さっきのあれ……シシリー、あんなこと思ってたんだ」

「え？」

「私だけお客さんだってやつ」

「あ……」

シシリーは、ハツとして手で口を塞いだ。

「知らなかった……そんな風に思わせちゃってたんだ……」

「だって……シン君とお婆様、あんなに仲が良いじゃないですか……」

「んあ？」

仲が良い？ これだけ毎日怒られてんのに？

「お婆様には陛下も、オルグラン師団長も逆らえないって聞いてます。そのお婆様にシン君はまるで遠慮がありません。それを見て……ああ、この二人は家族なんだなって思っ
って……」

「そっか」

確かに、ばあちゃんにも、爺さんにも遠慮することってないかな。

だって家族だし。

……ああ、そうか。

シシリーは、クロード家からウォルフオード家という別の家に嫁いでくることになる。

クロード家では当然だった家族の関係を、ウォルフオード家でも築きたいんだ。

「……でも、ばあちゃんはまだ全然遠慮しなくなってると思うけど？」

「私はまだ、シン君みたいに怒られたことないです……」

「そりやそうだよ！ シシリー怒られるようなことしてないじゃん！」

「……あ」

はあ、シシリーって、意外なところで天然だよな。

俺が見る限り、ばあちゃんはシシリーに対しての遠慮なんか微塵も感じられない。

それこそ、毎日のようにシシリーの実家に……。

「ああ、そうか。だから毎日温泉入りに行ってるのか」

シシリーは家族の一員だと。

クロード家は親戚なんだと認識しているから、遠慮がないんだ。

「それに……」

「ん？」

「シン君とも、本当の家族になりたいです」

「え？」

「もつと、特別な関係になりたいです……」

俺と本当の家族になりたい？

特別な関係になりたい？

それってどういう意味かと問い質そうとシシリーの顔を見上げる。

そこで、ようやく今の俺達の体勢に気が付いた。

シシリーは、俺の上に跨っている。

よくよく考えたらスゲー体勢だな！

こんな体勢で俺と家族になりたい、特別な関係になりたいとか言われたら、想像するのはただ一つ。

つまり……そういう関係になりたいって言ってるんじゃないか思えなかった。

「あ……」

ヤバイ！

一度想像してしまったら、体が言うことを聞かない！

この体勢だと……。

「え？ ……あ！」

最悪！ シシリーに気付かれた！

ああ、シシリーが顔を真っ赤にしてる！

これは……嫌われてもおかし……。

「シン君……」

「な、なに？」

あれ？

真っ赤になってるけど、俺の上からどかない？

どうし……。

「私の事……す、好きですか？」

シシリーは真っ赤な顔で、潤んだ瞳でそう訊ねてきた。

これは……。

「……好きだよ。大好きだ」

「……私も……」

そう言って、顔を近付けてきた。

これは……もう……。

キスをしたシシリーが顔を離すと、その顔はトロンと蕩けていた。

ああ、駄目だ。

もう抑えが効かない。

「きゃっ！」

上になつていたシシリーと体勢を入れ替えると、俺はシシリーの上に覆い被さった。

「これで……特別な関係になれる？」

「……なりたい……シン君と、特別な関係になりたいです……」

そう答えるシシリーは、今まで見たことが無い程色っぽく、そして綺麗だった。

「シシリー！」

「あっ！」

もう我慢できずに、シシリーに抱き付いた。

その時。

「アンタ達、いつまで課題やって……」

俺達は見た。

「アゝンゝタゝたゝちゝ……」

ばあちゃんの顔が、鬼に変わっていくところを。

「何やってるんだいアンタ達はあっ！！؟؟」

「ひうつ……」

特大の雷を落とされた俺達は、ベッドの上でお互いに抱き締め合ってしまった。

「課題ってのはなにかい！？ 生物の課題でも出されたのかい！？」

「うまい！」

「うまくない！！ 課題やるって言っておいて、何してんだいあんた達は！！」

「ご、御免なさい！」

今回はシシリーも一緒に怒られてるから、ひたすら謝ってる。

「いや、あの、課題もやって……」

「じゃあなにかい？ 課題の息抜きに、違うもの又或者としてたのかい？」

「うまい！」

「いい加減におしっ！！」

その後散々怒られた俺達は、ようやくばあちゃんから解放された。

「はあ……なんてタイミングで入ってくんだよ、まったく」

ばあちゃんって、いつもどっかで見てんじゃねえのか？

ようやく解放されて息を吐いていると、一緒に怒られていたシシリーが妙に嬉しそうに微笑んでいた。

「どうしたの？」

「ふふ、お婆様に怒られちゃいました」

あのばあちゃんから本気で怒られたのに、シシリーはそのことが本当に嬉しそうだ。怒られてる時は、反省もしていたし素直に怒られていたんだけど、それが終わったらさっきの自分の言葉を思い出したらしい。

「これedyouやく、ウォルフォード家の一員に近付いた気がします」

「これで感じるのはどうかと思うよ？」

「ふふ、いいんです。私が勝手にそう感じてるだけですから」

そんなもんかね。

でも、ばあちゃんと家族になったのなら……。

「ふーん。じゃあ、俺と特別な関係になるのは？」

「え？ あ、あ……」

ちよつと意地悪な言い方をしてみたら、さっきの出来事を思い出したのか、みるみる赤くなっていくシシリー。

そんなシシリーが可愛くて、その肩を抱き寄せ耳元で囁いた。

「また、今度ね」

「……は、はい」

そう言った後、見つめ合った俺達は、いつか来る特別な日のための約束として唇を近付けていき……。

「そういえばあんた達。もうすぐ夕飯だ……」

またかあつ！

「全然反省してないじゃないかい！ あんた達はあつ！！」

「ひゅっ」

ウォルフォード家に、本日三度目のばあちゃんの雷が落ちたのだった。

二人そろって再びばあちゃんに怒られながら、ふと思い出した。

あれ？

そういえば、シシリーはばあちゃんに怒られたことないって言ってたけど、前にもこうやって怒られたことがあるような……。

あ、夏合宿の時二人揃って怒られたことあるわ。

あの時はまだ婚約とかがしてなかった時だったから、シシリーの中ではカウントされないのかな？

それにしても……。

シシリーが怒られる時って、いつもこういうことが原因だな。

「……ほう？　怒られてるのに、何笑ってるんだい？」

「え？」

やべ。

考えごとしたら笑っちゃった。

「いい加減、反省することを覚えなあつ！！」

「ご、御免なさい！！」

それにしても……。

よくあんなだけ怒れるもんだな……。

体力的に……。

「聞ってるのかい！　このバカタレ！！」

とほほ……。

いつになったら終わるんだよ。

お腹すいたよう……。



「ほんに……ようやるわい。シンもメリダも……」

上の階からでも聞こえてくるメリダの怒声を聞きながら、マーリンは危うきには近寄らないと、静観を決め込んでいた。

「それにしても……腹減ったのう……」

シンとマーリンが夕飯にありつけるのは、まだ少し先のようにある。

(おわり)